

I. コロナ禍で感じ、考え、取り組んだこと

—理事長のひとりごと

中塚義実

昭和の終わりから平成、令和と、34年にわたって筑波大学附属高校の保健体育科教師として過ごしています。社会の変化や生徒の変化、および自分自身の変化を感じながら、高校教師として定点観測を続けています。また、サッカーをはじめとするスポーツにさまざまな形で携わっています。NPO 法人サロン 2002 もその一つです。

コロナ禍のこの1年、感じ、考え、取り組んだことをかいつまんで述べます。

1. 保健体育科教師として

3月から一斉休校。4月には休校期間の延長が決まり、年度の変わり目を高校生は自宅で過ごすこととなりました。私たち教師も先が見えない状況の中で、何ができるか、何をすべきかを真剣に考え、行動しました。

筑波大学附属高校ではいち早くオンライン授業を導入しました。このことについては学校のHP「休校期間中の本校の取り組み」をご覧ください。学習保障の議論が中心ですが、保健体育科ではその前に、生徒の心身の健康のことを考えました。学校がなくなって生徒は家にこもり、運動不足に陥り、スマホばかり見て昼と夜が逆転し、心と体のバランスを欠いている者が多いのではないかと想像しました。

そして年度当初に「保健体育科からのメッセージ」を発信することにしました。メッセージを発信するにあたり、まず教科の存在意義を考えました。学習指導要領にはそれらしいことが書かれていますが、自分たちで考え、保体科教師としての“魂”のありかを確認する作業となりました。

そして導かれたキーワードが「保健体育科は“いのち”を扱う教科です」というフレーズです。

20年以上前になりますが、保健体育の教科書執筆に携わったことがあります。保体科の教科書は「保健編」と「体育編」で構成されていますが、若造ながら編集会議で「高校の最初の授業で保健体育科を学ぶ意義を取り上げたい。プロローグを最初のページに持つ

てきてはどうか」と提案し、採用されたものがあります。いまでは絶版となっているその教科書に記したのがこのフレーズでした。一部引用します。

ほんとうに「ゆたかな」生きかたとはどのようなものでしょう。様々な考えかたがあるでしょうが、しかしひとつだけしたしかんことは、「いのち」の尊さということです。この世に自分があることの尊さを知り、与えられたいちを最大限に生かそうと努力することが、よりよい生き方につながってくるのです。

自分にとって、自分のいのちが尊いのも同じように、すべての人にとっていのちはかけがえないものです。自分さえよければよいという考えではなく、他人のいのちを尊重し、ともに生きていくこと（共生）が大切です。人間だけではありません。地球上にあるすべてのいのち、そして、それらを取りまく地球そのものも、すべてが生きていて、これからも生き続けるのです。

いまのわたしたちの行動が、将来にわたって取り返しのつかない大きな結果を残す可能性もあります。いまだけでなく将来も、自分だけでなく他人のことも、他の生物や地球全体のことも視野に入れてものごとを考えることが大切です。そして、小さな一歩でもよいから行動することです。

保健体育は「いのち」の尊さを学ぶ教科です。そのうえで、いま、何をなすべきかを考え、具体的な行動をうながす教科です。ただ単なる知識として「知っている」だけでは、たいして意味がありません。それをもとにして、どうやって自分なりに「行動する」かが大切です。

（東京書籍『高校保健体育』1999版。一部改編）

このような考えをもとに「保健体育科からのメッセージ」を作成し、全校生徒に配信しました。これがその後のすべての判断の基準となっています。ぶれない指針として、私自身、常にアタマの片隅に置いています。

保体科では4月22日から6月12日まで、休日を除く毎朝15分間、オンラインで「朝体操」を配信しました。夜型・運動不足・スマホ依存に陥っている生徒に午前中の運動機会を提供する試みです。任意参加ではありませんでしたが、大きな成果を上げたといえるでしょう。

6月になって分散登校がはじまったときも、体育実技

保健体育科からのメッセージ

緊急事態宣言が発令されました。新型コロナウイルスが猛威を振っています。私たちの日常生活は失われ、休校期間も延長されました。先の見えない不安な中での2020年度のスタートです。

その後、皆さんは、何を思い、どのように過ごしているでしょう。

保健体育科は“いのち”を扱う教科です。その立場から、皆さんにメッセージをお届けします。

課題も用意しました。動画とともになかみを確認し、さっそく取り組んでください。

1. 社会の一員としての自覚を持ち、責任を持って行動してください

ほんの少しの油断により、多くの人に感染症が拡大する様子が伝えられています。

政府や自治体、学校からの要請を、他人ごとでなく自分ごととして受け止め、実践してください。

想像力を働かせてください。もしかするとあなたは（私は）、発症していないだけで、すでに新型コロナウイルスに感染しているかもしれません。あなたの（私の）ほんの少しの油断によって、あなたより（私より）抵抗力のない人に感染が広がるかもしれません。

そうならないよう、いますべきことに全力で、誠意をもって取り組んでください。

2. 運動・栄養・休養のサイクルを確立し、自分自身の健康を保持・増進してください

ヒトとしての生活は、運動・栄養・休養のサイクルで構成されています。日々の学習も、趣味の活動も、すべてこのトライアングルの中で展開されます。

この時期、運動の量と質が低下しているのではないかと心配しています。保体科から課題を出しますのでしっかり取り組んでください。

栄養と休養についても、この機会に改めて、家族ぐるみで見直してみてもはどうでしょう。自分だけでなく家族のQOL（Quality of Life）向上に、あなたも貢献すべきです。

自己観察用のQCシートが有効です。活用してください。

3. この機会に学んでください

テレビやネットのニュースでは、未知のウイルスとその対策についての情報があふれています。

“いのち”を扱う教科として、この機会に学んでほしいことがたくさんあります。「感染症」や

「心身相関」について学習スライドと課題を用意しましたので取り組んでください。

延期になったオリンピック・パラリンピックをはじめ、スポーツやライブなどのさまざまなイベントが中止になっています。選手やアーティストの視点だけでなく、どれだけ多くの人々がかかわり、ささえる人々の生活はどうなっているのかについても学び、考えてください。

4. “遊び心”を持ってポジティブに取り組みましょう

保健体育科が主に取り扱うスポーツという文化はそもそも“遊び”です。「生きる」だけでなくてもよいが、「よりよく生きる」には不可欠なものだと、私たちは考えます。

スポーツやアート、音楽やダンスの原点には“遊び”があります。

困難な時期ですが、“遊び心”を忘れずに、ポジティブに取り組んでいきましょう！

筑波大学附属高等学校保健体育科

の時間は重視されました。健康・体力の回復だけでなく、仲間との交流の場として生徒もとらえていたようです。年度初めの苦しい時期に「何が大切か」を改めて考え、実践する日々でした。

9月以降は感染状況も安定し、いろんなことが再開されるようになりました。しかし11月後半から再び感染拡大が続き、年明けには2度目の緊急事態宣言となります。体育実技で何ができるかは、その都度5名のスタッフで考えながら進めています。“いのち”を扱う教科としての自覚を持ちながら…。

2. 「オンライン文化祭」を通して

学校教育の柱は各教科・科目の授業ですが、授業以外にも「特別活動」が教育課程に位置付けられています。ホームルームや委員会活動、学校行事などの特別活動は、学校生活を充実させる大切な活動であり、これらを通して

さまざまなスキルが育まれます。知・徳・体の全人教育を標榜する日本の学校で、特別活動は重視されています。

ところがコロナ禍の2020年度は、これら特別活動が大きく制限されました。宿泊行事は中止となり、文化祭や体育祭の開催も危ぶまれた4～5月ごろ、高校3年生の文化祭委員長が「どんな形でも文化祭はやりたい」と言ってきました。その声をくみ取った教師のサポートもあり、筑波大学附属高校ではオンライン文化祭に取り組むこととなりました。前年の文化祭指導委員長だった私は引き続き指導委員の一人として携わりました。試行錯誤の連続でしたが、「こんなことができるのか」と驚きの連続で、久しぶりに「いまだきの高校生」のパワーを感じることができました。

（注：「桐陰祭 Online」で検索できます）

2021年度の文化祭も指導委員長として携わることとなりました。オンラインでの成果を踏まえ、まだ続くであろう「with コロナ」も視野に入れ、対面とオ

オンラインの併用型を目指しています。楽しみです。

3. 部活動をめぐって

部活動は学校でやっているし学校の生徒が対象ですが、教育課程外の活動です。それでも生徒にとっては欠かせない、かけがえのない活動であることは、明治期以降、今日に至るまで変わりません。日本部活動学会や高体連（高等学校体育連盟）研究部では持続可能な部活動を目指してさまざまな取り組みの紹介や今後の方向性についての議論がなされ、私はそれらの組織の当事者として深くかかっています。もちろん私自身、中学生でサッカー部に入部して以来、今日に至るまで、部活動には深く関わり続けてきました。

ところがコロナ禍の2020年度は、学校行事と同じかそれ以上に部活動は停滞し、学校はまったく様変わりしてしまいました。部活動の「大会」も軒並み中止や延期、規模の縮小など、この1年は部活動にとって激動の年でした。このあたりについては11月の月例会と、日本部活動学会第3回研究集会（NPO法人サロン2002が後援）で取り上げました。そして「いまこそ部活動を生徒の手に取り戻すチャンス」との意見もいただきました。

しかしながら、いまのところ本校の生徒からは、文化祭委員長ほどの“熱い”提案はありません。言われたことは素直に受け止めますが、「私たちはこれだけのことをしますから、ここまでやらせてください」との声は生徒自身から出てきません。学校から心が離れているのでしょうか。部活動はそれほど重要ではないのでしょうか。それとも、声の上げ方がわからないのでしょうか…。「オンライン文化祭」では高校生のパワーを感じましたが、部活動をめぐってはもどかしい思いでいっぱいです。

一方、放課後の部活動がなくなったことにより、教師はその時間がフリーになりました。私自身、プレーヤー時代も指導者になってからも、サッカー部の活動には多くの時間を注いできました。3～4年ほど前から部活動に顔を出せなくなってきたのは、学年主任になって部活動の時間に打ち合わせ等の校務が入ることが多くなったことと、若手スタッフに現場を任せられるようになったことが影響しています。そして新型コロナで部活動そのものがなくなったこの1年、放課後の時間帯や週末に、自由時間ができました。

「部活をみていない先生は、こんなに時間があつたのか」ということを改めて感じました。こちらは練習

をみたあとの18時ごろから自分の仕事をしていたものです。早い時間に帰宅できるわけがありません。一方、部活動がなければ15時ごろから自分の仕事ができます。また週末が自由に使えるのもいいですね。新たな発見です。

これが「働き方改革」なのでしょう。一気に進んだと感じています。

4. NPO サロンの事業を通して

学校から離れ、NPO サロンの活動を通して感じたことを述べます。この広報誌にも紹介されているとおり、NPO サロンの中核事業である月例会と公開シンポジウムが、今年はオンラインでの開催となりました。はじめのころは、ほんとうに対面のときと同じように意思疎通ができるのだろうかと思信半疑でした。けどやってみると、これがなかなかいい！ オンライン懇親会もすっかり慣れました。「話を聞く（伝える）」だけなら、通信環境の問題を除けば対面よりもいいかもしれません。加えて、集まる必要がないので遠方にいる人が参加できます。サロンのメンバーには海外在住の方もおられます。11月にはベルリンからも参加してくれました。また公開シンポジウムの第1部は全国各地から、第2部は上海から演者が発信しました。こういうことができるようになったのです。

その一方で、日常の混在、あるいは日常と非日常の区別がつかなくなったことが、課題として挙げられるでしょう。オンライン授業の難しさは、受信する側が、家庭という日常の場に、職場や学校という別の日常が重なり合っているところにあります。また、オンラインイベントに家庭から参加する際、非日常のイベントに家庭での日常の営みが重なり合い、「全集中」できない場合があるようです。イベント参加のハードルを下げるという意味では歓迎されることですが、参加そのものの重みが低くなっていくのは残念です。一つひとつがいい加減になっていくのではないかと心配もあります。

この一年、ほんとうにいろんなことを感じ、考え、そして慣れないことも含め、取り組みました。定年前の教育現場でこの事態に直面し、当事者として対応した経験はかけがえのない財産です。さらに、NPO法人サロン2002の運営や事業を通して、またさまざまな分野の“同志”の取り組みを通して、「“ゆたかなくらし”の新しいすがた」を自分なりにイメージすることができつつあります。「After コロナ」への第一歩です。

Ⅱ. 主催者として感じ、考え、取り組んだこと

ー 第5回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップをめぐって

中塚義実

第5回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップをめぐっては、開催すべきか否か、「新たな様式」とはいかなるものかと、ここでも主催者としていろんなことを感じ、考え、取り組みました。

次にそのことについて述べます。

1. 開催に至るまでの経緯

1) 実施要項確定・配信 (11/27)

NPO サロン理事会での審議を経て、大会の実施要項が確定したのが11月末のことでした。できるかできないか、できる場合はどのような対策を講じるのか。想像力を働かせながら実施要項に落とし込む作業はなかなか難しいものでした。16チームのノックアウト方式(敗者同士の交流試合あり)でチャンピオンを決すること、単独チームでの参加が困難な場合は「リーグに出場した選手による選抜チーム」の出場も認める形としました(実際はそのようなチームは出てこなかった)。

この段階で首都圏だけでなく、開催地長野県においても感染者数が増えはじめ、第三波の襲来が現実のものとなりつつありました。長野県サッカー協会フットサル委員長の村山吉朗氏とは電話等で連絡をとり合いましたが、「現状がギリギリのレベルであると考えるべきで、これ以上の感染レベルが上がる場合は1か月前に判断する必要がある」とのご意見でした。出場するチーム・選手・スタッフだけでなく、運営側、そして地元での受け入れ側(体育館や旅館組合など)の状況も考慮する必要があることを改めて感じました。

2) 千曲市訪問と打ち合わせ

(12/12～13)

例年は11月初旬に現地へ赴き、挨拶かたがた視察と打ち合わせの場を設けていましたが、コロナの影響もあり延び延びになっていました。しかし年内

には顔合わせが必要です。ちょうど12月13日に公開シンポジウムを予定していたので、そのタイミングで訪問することにしました。

12月12日の午後、神戸から本多克己、東京から中塚義実が信州千曲観光局に出向き、同専務理事の小沼浩栄氏と対面しました。コロナ禍で観光客が激減した地元はこの大会の開催を心待ちにしており、万全の態勢で受け入れ準備を整えているとのことでした。しかし無理はできません。そのことも共有しました。

長野県フットサル連盟理事長の菅原基信氏、筑北サッカークラブの土屋好史氏も合流し、競技運営面、とくに感染予防対策について詳細な打ち合わせができました。長野県フットサル連盟では3月に「長野オープン」を毎年行っており、そこにつながる運営を目指してこの大会でも万全の態勢で臨む準備を進めています。中塚は東京都サッカー協会フットサル委員会や東京都高体連サッカー専門部で用いられる感染対策ガイドラインを持参し、すり合わせをしました。緊張感をもってこれらの話ができただけはよかったことです。

打ち合わせ後、本多と中塚は「GOTO イート」の割引券を用いて千曲市内の「羽衣」というお店に出かけ、地域経済にも貢献(?)しました。ご家族で経営される小料理屋で、感染対策は十分為され、あたたかいおもてなしを受けました。宿舎のホテルプラトンの温

第5回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

- 11月27日(金)
長野FA 村山氏「現状がギリギリのレベルであると考えるべきで、これ以上の感染レベルが上がる場合は1ヶ月前が検討レベル」
- 12月12日(土)15:00～17:30
信州千曲観光局にてMTG(対面)
→ GOTO利用で地域経済活性化「羽衣」→ ホテルプラトン
- 12月13日(日)10:00～12:00
公開シンポジウム
- 12月16日(水)19:30～21:00
TFAフットサル委員会 コロナ対策MTG
- 12月26日(土)17:30～18:30
NPOサロン 映像配信スタッフMTG
- 12月29日(火)14:00～15:30
長野FF菅原氏・土屋氏とMTG
- 12月30日(水)14:00～16:00
NPOサロン映像配信スタッフMTG
- 2021年1月4日(月)19:00～20:30
代表者会議
- 12月5日 研究大会
- 12月6日
日本部活動学会研究集会
- 12月13日
公開シンポジウム
- 12月26～27日
「ベルタン」嘉納YF2020

泉は毎回秀逸です。

12月13日の公開シンポジウムの第1部「イベントを中心に」は、前日に続いて信州千曲環境局から配信しました。小沼氏もゲストとして参加し、本多氏が紹介するU-18フットサルリーグチャンピオンズカップを地元がどのように受け止めているのかについてコメントをいただきました。

3) 悪化する感染状況と「新たな様式」の模索

年末に向かう中で、状況は徐々に悪化していきます。実施の方向で準備を進めてはいますが、各方面と連絡

をとりながらどう判断すべきかを思案していました。

身の回りで12月にさまざまな行事が重なっており、それらと並行しながらの準備です。12月5日に勤務校の研究大会で保健体育科の取り組みを発表し、翌12月6日には日本部活動学会研究集会でコロナ禍における部活動を取り上げ、翌週12月13日は公開シンポジウム、さらに12月26～27日にはクーベルタン-嘉納ユースフォーラム2020が控えています。さらに同時進行で、1月中旬にはじまる東京都サッカー協会(TFA)フットサル委員会主催「第20回東京都ユース(U-15,U-18)フットサルフェスティバル」

ごあいさつ

「withコロナ」の新たな様式を求めて

世界的なパンデミックが続きます。日本列島も「新型コロナ」の第3波に見舞われ、GOTO事業は一時停止し、年末年始は移動を控え静かに過ごすことが求められています。

このような中で第5回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップが開かれようとしています。開催すべきか否かについては、地元長野県の方々や全国各地のリーグ関係者、他種目や学校の関係者ほかさまざまな方と意見交換してまいりました。主催者としては、「できる可能性があるのなら、とことんそれをやりきろう！」と考え、開催の方向で準備を進めております。

ただし、<大会に携わるすべての人が「withコロナ」の新たな様式を理解し実践する>ことが条件となります。先に結論ありきではありません。スポーツを通してのゆたかなくらしづくりを“志”に掲げる主催団体・NPO法人サロン2002は、「生きる」だけならなくてもよいが、「よりよく生きる」には欠かせない文化としてスポーツやアートをとらえています。そして、「生きる」ためにこれらの文化的な活動が制限されるのはやむを得ないと考えています。まず守るべきは“いのち”であり、大会に関わるすべての人の“健康と安全”です。「大会がなくなると選手がかわいそう」や「どうしても出場したい」気持ちはわかりますが、その前に「どうすればコロナ禍でできるか」とことん突き詰め、実践していく姿勢を求めます。すべての人の方向性が一致したとき、はじめてこの大会が成立するのです。厳しいですが、そこを乗り越えなくてはなりません。乗り越えた先に多くの方の理解や賛同が得られ、「スポーツのチカラをカタチに」できると信じています。

競技会の運営面はもちろん、宿泊についても地元旅館組合で万全の対策を講じてもらっています。もちろん感染予防対策は大会期間中だけではなく、日常からはじまり、日常の延長上に大会があり、そこで得たものが日常に生かされます。参加者自身がこの大会の担い手なのです。

無観客試合はいつもと異なる風景となるでしょう。応援したい方にはリモートで楽しんでいただけるよう、主催者側で動画配信サービスに取り組みます。新たな様式の一つです。個人情報保護の観点から限定公開の形になりますが、趣旨をご理解の上、サービスを活用していただければと思います。

従来から掲げる二つのねらい—U-18年代のレベルアップと日常的なリーグ環境の整備—に加え、昨年度の大会では「スポーツのチカラをカタチに」のスローガンを掲げました。洪水被害に見舞われた地元の方々に、少しでも勇気や喜びを提供できるものであってほしいとの願いを込めたものです。

今回も「スポーツのチカラをカタチに」を改めて掲げます。すべての人が「やってよかった」と思える大会となるよう、力を合わせて作り上げましょう！

令和2年12月30日
特定非営利活動法人サロン2002
理事長 中塚 義実

についても、開催するための感染予防対策の議論を進めていました。12月16日の夜に各カテゴリーの担当者によるオンラインミーティングを開き、「緊急事態宣言が出ない限り、実施の方向で準備を進める」ことが確認されました。こうした議論が、判断の際に大いに参考になりました。(注：TFA主催大会は、緊急事態宣言が出されたため中止となった)

すでに無観客開催ということは伝えていますが、しかし今年度唯一のU-18年代の全国規模の大会です。観戦・応援したい保護者や仲間は大勢いることでしょう。そのニーズに応えるために、動画を配信できないかと、NPOサロンの関係者で話を進めていました。12月26日の夜にはその1回目のミーティングが開かれ、30日に再度打ち合わせをして細部を詰めていくこととなりました。

1月4日に代表者会議があるので、年内に詳細を確認する必要があります。12月29日に長野県の方々とオンラインMTGをして細部を詰めました。

12月30日には出場チーム代表者宛に大会概要(代表者会議資料)を配布。主催者挨拶では<「withコロナ」の新たな様式を求めて>と題して思いを述べました。(左ページ)

4) 緊急事態宣言と代表者会議

三が日が明けた1月4日、菅義偉首相の年頭記者会見において「緊急事態宣言発令見込み」が述べられます。いよいよです。

同日19時からの代表者会議に備え、こちらも考え方を整理しておく必要があります。長野県の方々と電話やメールでやり取りしながら、下スライドにあるような考え方を共有しました。<大会に携わるすべての人が「withコロナ」の新たな様式を理解し実践する>ことが条件であることを再確認し、代表者会議はすべての関係者のベクトル合わせの意味を持つ重要な会議であることを共有しました。

緊急事態宣言発令見込みを受けて(1月4日)

- 1) 「緊急事態宣言」ではあるが、
地域的にも業種的にも限定的なものとなる見込みである
スポーツ(ここではフットサル)がNGということではない。
 よって、引き続き感染予防対策を徹底し、開催準備を進める。
- 2) 当該地域からの移動がネックとなる可能性はある
(出場を見合わせる場所が出てくるかも)
よって、チーム数が減る可能性がある。
 それにより大会形式が変わる可能性もゼロではない。
 1月6日(水)夕方までに、改めてその時点での判断をお伝えする。
- 3) 最悪の場合、中止もありうる。
大会期間中に中止となる可能性もある。
<大会に携わるすべての人が「withコロナ」の新たな様式を理解し実践することが条件である。
 今日の代表者会議は、**すべての関係者のベクトル合わせ**の意味を持つ重要な会議である。

代表者会議ではこの考えを冒頭に述べ、また年末に送信してあった「主催者挨拶」を用いて前提となる考えを共有しました。出場チーム自らが「withコロナ」の大会の担い手であるという意識が不可欠です。また、代表者間で共有するだけでなく、すべてのプレーヤーにこの思いを伝えることが必要です。代表者会議では最後にそのところを強調しました。

緊急事態宣言がどのような形で発令され、どの範囲に及ぶのかについてはまだわかりません。1月6日に改めて、その時点での判断をお伝えすることにして代表者会議を終えました。

5) 1月6日と7日の動き

緊急事態宣言は1月7日に発令されますが、なかみについてはその前から徐々に明らかになってきました。こちらが想定していた内容です。あとはそれを各チームとその選出母体がどう受け止めるかです。

1月6日の関係者MTG(主催者側の中塚・本多と主管側の菅原・土屋)を経て、各チームには、主催者の考えとして「現時点では予定通り開催する」ことを伝えました。同時に、大会への参加について、各チームの選出母体となるリーグ責任者と、当該地域の連盟・協会に確認してもらいたいとのリクエストを出しました。ただ単に「出たいから」「出させてあげたいから」ではありません。すべての関係者に気持ちよく送り出してもらうことが不可欠です。

1月6日(水) 13:00~14:00 関係者MTG

1. 大会の開催について(主催者の判断)

現時点では「予定通り開催」します。ただし、緊急事態宣言の対象地域(見込み)である1都3県のみならず、開催地・長野県内の感染拡大が続いており、予断を許さない状況にあります。明日(1月7日)の午前中に、何らかの判断が長野県から示される見込みです。それを受けて明日15時より運営側でオンライン会議を開き、最終的な判断をさせていただきます。17時までにご連絡します。開催できなかった場合は「中止」となります(延期の可能性も探りましたが「無理」と判断しました)。

2. 大会への参加について(各チームへの依頼)

各チームが参加できるかを改めてご確認のうえ、ご連絡ください。出場チームは、それぞれ選出母体となるリーグがあります。まずはリーグ責任者に対して「このような状況下であるが参加しやすいか」をご確認ください。加えて、選出母体となるリーグは「地域または都道府県のフットサル連盟が主催、主管または後援して開催される(大会要項より)」ものなので、連盟の責任者にも改めてご連絡ください。確認していただいた結果を事務局までご連絡ください。お忙しいところ恐れ入りますが、1月7日(木)12時までにご回答いただけないでしょうか。よろしくお願いたします。

補足: 感染予防対策の徹底について

すでに代表者会議で申し上げた通り、最大限の感染予防対策をします。主催者側が徹底することはもちろんですが、改めて各チームにおいても徹底してください。

とくに注意していただきたいのが「移動」と「食事」場面です。

すべての選手・役員が同じベクトルで臨めるよう、よろしくお願いたします。

1月7日には全チームから回答が得られ、すべてのチームの参加問題がクリアされました。この時点で、当初の計画通り大会を実施することが決まり、動画配信スタッフの割り振りがはじまりました。時間がないうちで、NPOサロンの会員・メンバーに協力してもらえたのはありがたいところです。

2. 大会の実際

1) 大雪の影響

1月8日の大会前日、本多はじめ数名のスタッフが現地入りします。中塚は本務の都合で一日遅れの参加です。

ここで別の問題が発生しました。北陸地方の大雪です。富山から動画撮影スタッフとして参加の橘和徳氏は、市内を抜けるだけで数時間費やし、ルートを北陸道から岐阜まわりに変更して何とか深夜0時ごろ宿に到着しました。そして大会初日の第一試合、富山県から参加の不二越工業高校が大雪に行く手を阻まれ間に合わず、不戦敗となるアクシデントで大会が始まりました。コロナ禍で前泊が学校から認められず、当日は朝5時に富山発の予定を3時発に前倒したにもかかわらず、千曲市に着いたのは11時。キックオフの10時には間に合いませんでした。幸い初日の全試合終了後、運営サポートをしてくれていた地元クラブとの練習試合が実現し、双方にとって良い経験となりました。

2) 動画配信

新たな様式として試みた動画配信ですが、会場のwifi環境の影響で思うような画像を配信することができません。それでも試行錯誤しながら、2面あるピッチをそれぞれ逆側から撮影し、2試合同時に試合動画をライブで配信できたことは大きな成果です。詳細は田島璃子氏、橘和徳氏の報告にある通りです。限られた時間、設備の中でできるベストの取り組みだったと思います。

3) 万全の感染予防対策

会場においては万全の対策が施されました。旅館組合でも徹底した対策が為され、移動・宿泊・食事といったプレー以外のところでの対策は十分為されたと言ってよいでしょう。

しかし高校生年代はすぐに気が緩んでしまいます。そのことは高校教師をしているのでわかります。「密になってるぞ」などと声をかけながら会場を巡回していました。

4) 競技者における「新たな様式」

ピッチ上では思う存分プレーしてもらいます。競技中の接触は問題ありません。ただし、スポーツ活動そのものではありませんが、たとえば試合前後の円陣や雄たけびの声を上げるのはNGです。円陣を組まな

くても、雄たけびの声を上げなくても、内面から盛り上げるのが「新たな様式」だと考えます。その意味で、得点場面や勝利の瞬間の抱擁なども控えてほしいところであり、ここにも「新たな様式」を求めたいと考えます。



準決勝のマッチコーディネーションミーティングでは、主催者から改めてこのことをお願いしました。「モデルは1964年東京オリンピック柔道無差別級優勝のヘーシンクです」と。何のことかわかっていない様子だったので少し補足を。

オリンピック競技会で初めて採用された柔道の、無差別級のチャンピオンが、日本人ではなくオランダ人となりました。本人はもちろん、周囲のスタッフも大喜びのはずです。現にオランダのスタッフは喜びのあまり畳に駆け上がろうとしましたがそのとき、ヘーシンクは、自分のうれしい思いをぐっとこらえて、駆け上がろうとするスタッフを制したというエピソードです。とてつもなく大きな喜びを、とてつもなく大きな自制心で抑えることが「新たな様式」では求められるのかもしれませんが。そんな気持ちでこのエピソードを紹介しました。

5) 決勝戦そして閉会式

決勝戦は東京勢同士の対戦となりました。そして素晴らしい試合でペスカドーラ町田が初優勝。U-18フットサルの先進地域である東京都にとっても初の栄冠でした。

しかし閉会式の時点でもまだ「よかった」と言い切れるほどの確信が持てないままでした。主催者挨拶では「おめでとう」「ありがとう」の前に、「まだ大会は終わっていない」趣旨のコメントをしました。

以下、大会報告書から一部引用します。

多くの方から「開いてくれてありがとう」と言ってもらいましたが、決勝戦が終わったあとも、まだ確信は持てませんでした。ほんとうに「新たな様式」は徹底できたのだろうか。また「新たな様式」と我々が思

っている方法は、ほんとうに適切だったのだろうか…。見えない敵との戦いは、フットサルの試合よりはるかに難しいものです。閉会式の主催者挨拶では、そんな気持ちが頭の中にあっただけで、「おめでとう」「ありがとう」より先に、開催判断の難しさと「まだ終わっていない」ことを述べました。「少なくとも家に帰って2週間は自己観察を続けてください。そこまでが大会です」と。さらに、「この大会で感じ、考えた“With コロナ”の新たな様式は、これからもずっと続けてください」と続けました。「新たな様式」は大会期間中だけでなく、普段から心がけ、実践していくもの。心からそう思います。

3. 大会を終えて

2週間が経過し、すべての参加者の安全が確認されました。これでようやく大会終了です。ほっとしました。

とにかくこの間、いろんなことを考えました。大会を開くべきかどうか。開く場合は、開かない場合は…。

「大会がないと選手がかわいそう」「3年生の“最後のひのき舞台”を」の声をよく聞きます。気持ちはよくわかります。しかし、スポーツよりも大事なものは“いのち”です。いま為すべきことは、その観点から考えるべきです。また、そもそも大会があろうがなかろうが、好きなスポーツは「できるとき」にやればよいのです。アマチュアに「引退」はありません。

いまは「できるとき」なのか否か。そこの判断が難しいところでした。そして私たちは、「少しでも可能性のあるならとことんやり切ろう」と考えました。

大事なはその思いを、大会にかかわるすべての人が共有することです。主催者だけが思っているだけでもだめですし、指導者間で共有しているだけでも不十分です。すべてのプレーヤー、保護者、審判員、運営スタッフ、会場関係者、移動・宿泊・食事を含むあらゆる場面にかかわるすべての人が、思いを共有することが不可欠です。大会の主催者としてこだわったのはその部分でした。そして、覚悟と危機感を持ったうえで、それでも「やる！」と決め、やり切りました。

今大会でどこまでできたのでしょうか。こちらからはみえない部分もあるので本当のところはわかりません。しかしいづれにしても、「参加者自信が大会運営の担い手である」という考え方は、これからも残していきたいと思えます。

今大会で用いたガイドラインを示します。コロナ禍でのイベント開催の参考にいただければ幸いです。

ただしガイドラインやマニュアルは、「つくる」のが目的ではありません。守らなければ意味がありません。

もっと言うと、書かれていることを「守る」のが目的だとするのもおかしい話です。書かれていないことが発生するかもしれないし、書かれたことを守ったとしても感染するときはするのです。

感染しない、させない、不安にしない、させないことが大事なのであって、ガイドラインやマニュアルとにらめっこしていても仕方ありません。

信号と同じです。

以前、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というギャグがありましたが、その逆についてはどうでしょう。

「青信号、みんなで渡れば怖くない」となっていないでしょうか。

青信号でも、横から猛スピードで突っ込んでくる車があるかもしれません。だから青信号のときにもまわりをみなくてははいけません。事故にあわないことが大事なのであって、信号を守ることが目的なのではありません。

自分自身でまわりをみて状況を把握し、考え、行動するのです。このあたり前のことを忘れてはなりません。

サッカーやフットサルで常にやっているこのサイクルが、コロナ禍で忘れ、失いかけているのではないかと感じます。

まったくわからなかった段階では、何をしていたかわからないので、しかるべき機関が示してくれるガイドラインに沿ってものごとを判断するしかありませんでした（いまでもその要素はあります）。

しかしガイドラインにすべて書かれるわけがありません。自分自身でまわりをみて、考え、行動するのです。

大会を通して、またコロナ禍のさまざまな取り組みを通してこのようなことを考えました。

U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップおける 新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン

特定非営利活動法人サロン 2002、長野県フットサル連盟

新型コロナウイルス感染症の影響が考えられる状況下において、大会を開催するにあたり、以下を基本方針とする。

■参加チーム（選手、スタッフ）、競技会関係者（審判員、運営担当者）の健康と安全を第一に考え、新型コロナウイルスへの感染対策を十分に行う。

■政府、自治体、上部団体（（公財）日本サッカー協会、（一財）日本フットサル連盟、（一社）北信越サッカー協会、北信越フットサル連盟、（一社）長野県サッカー協会）が発信する指示に従う。

また、大会を開催するためには以下の項目を参加チームおよび競技会関係者が理解し、実行できることを条件とする。

- ① 競技会が開催される自治体の方針に従うこと。
- ② 参加チームが所在している都道府県および都道府県教育委員会が開催地を含めた都道府県間の移動を認めていること。
- ③ 参加チームの選手全員が試合に向けたコンディションが整っていること。
- ④ 参加チームおよび競技会関係者が日頃より「新しい生活様式」に従って感染対策を実践していること。
- ⑤ 競技会会場において運営担当者が十分な感染防止対策を実行できること。

以下、競技会開催において留意すべき事項、準備すべきポイントを記載する。参加チームおよび競技会関係者は、これを『ガイドライン』として競技会・試合運営／チーム運営を行うこと。

1. 日常のチーム活動におけるガイドライン

- ・チームは日頃から選手の健康管理に努めること。
- ・日頃の活動から3密を避ける行動をとること。
- ・練習時以外はできる限り集まらずに、ミーティングも人との間隔を空けて実施すること。
- ・各チームでも日常的に選手の体温や体調を管理すること。熱がある場合はチーム練習参加不可とすること。
- ・チームの練習での飲水、ピブスは他の選手と共有しないこと。
- ・万一、チームから感染者が出た場合には、直ちに各都道府県フットサル連盟理事長に報告すること。

2. 開催におけるガイドライン

1) 開催方法

- ・参加チームおよび競技会関係者のみの無観客開催とする。
- ・当日は、定められたエリアで着替え、待機し、試合終了後は速やかに退館すること。

2) 事前対応

運営責任者は、会場において感染防止対策に向けた準備を行うとともに、参加チームに対し、感染防止のために選手・スタッフが遵守すべき事項を明確にして事前に連絡し協力を求める。長野県フットサル連盟および参加チームはそれぞれ感染対策責任者を設置し、事前・試合日・事後に相互に連絡を取り合える環境を構築すること。

【参加者への連絡事項】

大会運営責任者が参加チームおよび競技会関係者に対して事前に求める感染拡大防止のための措置として、以下の項目を挙げる。当日運営担当の感染対策責任者は参加チームの感染対策責任者および競技会関係者（事前に申請したメディア等も含む）に対し、以下の項目を競技会開催前に伝えること。

- ①参加チームおよび競技会関係者は試合当日に朝に必ず検温を実施する。
- ②参加チームおよび競技会関係者はマスク（マウスシールドはNG）を着用する。但し、試合中の選手の着用は免除する。

③参加チームおよび競技会関係者は会場到着時に健康観察を行い、体調に少しでも異常がある場合は参加を見合わせるなどの対応を取る。尚、平熱を超える発熱（概ね37.5度以上）がある場合は、自覚症状の有無に関わらず、出場及び会場での活動は認めない。

④参加チームは過去14日間のチーム全員の健康状態をまとめた「健康チェックシート」を全員から回収し保管する。シート記載の内容を集約した「提出用健康チェックリスト」を作成し1日目会場到着時に受付へ提出すること。全員の検温（非接触型検温計）を実施する。2日目以降は入館時に検温を実施する。競技会関係者も同レベルの健康チェックを個人単位で行い、当日運営担当の運営責任者へ提出すること。

⑤以下の事項に該当する場合は自主的に参加を見合わせること。
・過去14日以内に健康状態に問題（発熱、味覚・嗅覚障害など）がある場合

・過去14日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航又は当該在住者との濃厚接触がある場合

・同居家族や身近な人に感染が疑われる方がいる場合

⑥競技当日の行動や他人との接触状況を記憶しておくこと。（感染者発生時の濃厚接触者特定に必要）

⑦運営担当の運営責任者が示す注意事項を遵守すること。

⑧今後の長野県地域における新型コロナウイルスの感染状況や全国の状況等を踏まえて、競技会の安全な実施が困難である場合は、競技会中止の措置をとることもある。

⑨参加チームおよび競技会関係者は「新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）」をインストールすること。

※提出用健康チェックリスト（別添）には以下の事項を記載してもらおう。

i チーム名、チーム感染対策責任者名、感染対策責任者のサイン、競技会名、記入日

ii 選手、スタッフ全員の競技会2週間前から当日までの健康状態、当日の体温

3) マッチコーディネーションミーティング

運営担当の運営責任者は3密にならない環境の場所を準備し、最低限の確認と通達を行い、短時間で完了する。メンバーは各チーム1名、審判員1名（主審 or 第2審、または第3審 or TK が代行出席の場合もある）運営責任者（＝感染対策責任者）、統括責任者とする。連絡事項・注意事項等は可能な限り事前にメール及び文書で展開する。1回戦のユニフォームは事務局で事前に決定し代表者会議で通知する。当日は使用する全ユニフォームの色がわかる写真を持参すること。

運営担当の感染対策責任者はMCMに出席し、運営に関わる注意事項として以下の項目を当該チーム、審判員に伝える。

【共通の伝達事項】

- ・タイムスケジュールについては運営責任者の指示に従う。（チーム同士が極力接触しないことが望ましい＝導線の確認）
- ・荷物置場、着替えについては運営責任者の指示に従う。（ソーシャルディスタンスを保ち、3密にならないような対応）
- ・セレモニーは実施しない（試合前後の選手・審判団との握手、ベンチへの挨拶）。
- ・チーム写真撮影の時間は設けない。撮影する場合は練習時間内に行うこと。主催者では2日目に各チーム写真を撮影する。
- ・試合開始7分前より用具チェックを行い、完了後、先発5人

がピッチに入りキックオフとする。

- ・ピッチ内でも咳エチケットを守ること。
- ・水のボトルを共有しないこと（個人のスウィズボトルまたはペットボトルを準備）。
- ・水、氷を溜めたクーラーボックスを使用しないこと。
- ・タオルを共有しないこと。
- ・原則、倒れた選手に手を貸さない（負傷の場合は除く）。
- ・ピッチ上でチームメイト、審判員と会話する際にも互いに十分な距離をとること。
- ・MCMでのユニフォーム、ビブスの提示は写真とする。
- ・本紙「新型コロナウイルス感染症対策ガイドライン」に沿って行動すること。
- ・原則、ベンチ内で使用する交代選手用ビブスは、各個人用とすること。試合に登録する選手人数分のビブス（異なる色を認める）を準備すること

【チームへの伝達事項】

- ・ボールを用いたアップは試合前のみとし、その他のアップは運営責任者の指示に従うこと。（ハーフタイムおよびピッチサイドでのアップは基本的に行わない）
- ・チームミーティングは会場内で3密とならないスペース等で実施すること、その際は、十分な距離を確保すること。
- ・円陣はしないこと。
- ・得点時にハイタッチ、抱擁を行わないこと。
- ・役員とスタッフはマスクを着用し、会話を控えること。
- ・ビブスは個別に使用できるよう人数分用意すること。特例としてFPと色が区別できれば、ビブスの2色 利用もしくは練習着でも可とする場合もある。
- ・試合会場へは、エントリー選手・役員のみ入場すること。

【審判員への伝達事項】

- ・主審、第2 審はマスクなし、第3 審、TK はマスクを着用。会話を最小限に留める。
- ・タイマー、ファールカウンター等の備品は試合前に消毒する。
- ・審判控室は十分な換気を行い、滞在時間を極力短くする。
- ・審判員同士のミーティングは会場内で3密とならないスペース、一定の距離をおいて実施すること。

【記録、BP への伝達事項】

- ・試合前に手指消毒した上で、マスク、手袋を着用する。手袋は使い捨てのものを連盟で用意する。
- ※上述の伝達事項は、参加チーム、競技会関係者が競技会参加にあたり留意すべき事項でもあります。長野県フットサル連盟の感染対策責任者から各チームの感染対策責任者および競技会関係者に事前に伝達する。

4) ゴミの廃棄方法

- ・チームのゴミは各自にて持ち帰ること。
- ・ゴミはビニール袋に入れて密閉し、廃棄する。ゴミを収集する際は、マスクや手袋を必ず着用する。
- ・マスクや手袋を脱いだ後は、石鹸と流水で手を洗い、手指消毒する。

※これら (2) ~ (4) を実施しても感染リスクをゼロにすることはできませんが、参加チーム、競技会関係者は、その点をご理解願います。

5) 当日参加チームおよび競技会関係者が体調不良を訴えた場合

当該者は速やかに退館し、病院で受診すること。受診結果を直ちに運営担当の感染対策責任者へ報告し、新型コロナウイルス感染の疑いがある場合（PCR 検査実施）は検査結果も分かり次第報告すること。

6) 事後対応

万が一感染が発生した場合に備え、個人情報の取り扱いに十分注意しながら、選手・スタッフ、競技会関係者から提出された健康管理チェック表を保存する。

各チームの感染対策責任者は、競技会終了7日後（1月17日）に大会の感染対策責任者（本多：u18salon2002@gmail.com）へフォーム（<https://forms.gle/waV7xrcA7ArHCua69>）で、具合の悪い選手・スタッフがいないか報告すること。競技会関係者も同様に報告を行う。万が一、参加チームまたは競技会関係者の中から競技会終了後7日以内に新型コロナウイルスへの感染者が判明した場合は、保健所の指示に従うとともに、長野県フットサル連盟の感染対策責任者にその旨を報告すること。

7) 参加チーム関係者に新型コロナウイルスの感染者が出た場合

当該チームは、感染対策責任者（本多：u18salon2002@gmail.com）に直ちに連絡する。報告を受けた都道府県連盟理事長は開催県の長野県フットサル連盟理事長へ報告することを義務とする。

8) 学校、クラブの通達、または本人が感染または濃厚接触者になりチームへの参加ができなくなった場合、特例として選手、役員の変更を1月4日の代表者会議開始まで認める。

3. 試合の中止

- 1) 大会期間中に感染者が出た場合は大会を中止とする。
- 2) 緊急事態宣言もしくは緊急事態宣言に準じる宣言が出た場合、その対応は主催者で検討の上、状況に応じて判断する。

【参考】競技会会場における感染防止対策

運営担当の運営責任者は、以下の点に留意して会場の設営、競技会運営を行うこと。

【施設入口】

会場への入退場は北側入り口に限定し、消毒液を設置し、無観客試合であることを告知する。（HP、SNS、会場での掲示等）

【諸室】

- ・アルコール消毒液を設置する。
- ・室内又はスペース内で複数の参加者が触れると考えられる場所（ドアノブ、ロッカーの取手、テーブル、椅子等）については適宜消毒する。
- ・換気扇を回し、2つ以上のドアまたは窓を開けっ放しにして、換気状態を保つ。
- ・ドアは、出来る限り開放し、接触感染を防ぐ。
- ・座席を設置する際は2m以上間隔をあげ、お互いが正面に座らないよう配慮する。
- ・なるべく大きな部屋を活用し、参加者同士がソーシャルディスタンスを保てるようにする。
- ・ドリンクを冷やすためのクーラーボックスなどによるドブ漬は行わない。
- ・運営側で喫煙所は設けない。

【トイレ】

- ・手洗い場にポンプ型の液体または泡石鹸を用意し「手洗いは30秒以上」等の掲示をする。
 - ・手洗い後に手を拭くためのハンドタオルは各自が持参し使用すること。
- （布タオルや手指を乾燥させる設備については設置 / 使用しない）

【ロッカールーム】

- ・ロッカールームは使用せずスタンド等で着替えを行う。
- ・女性用のみロッカールームを使用可能とする。

【ピッチ】

- ・ピッチの出入り口にアルコール消毒液を設置する。
- ・ピッチ上で複数の参加者が触れると考えられる場所については適宜消毒する。
- ・試合間など試合に影響のない範囲でドアや窓を開け、換気状態を保つ。
- ・ベンチの椅子は1m以上間隔を空け、2列に18脚設置し試合中の共有をしない。
- ・試合終了毎にチームにてベンチの消毒を行う。ハーフタイムでのベンチの交代、移動は行わない。

健康チェックシート

改訂版 20_0816

(大会参加者が未成年の場合) 保護者 確認欄

本健康チェックシートは、長野県アウトドア連盟が開催する各種大会において新型コロナウイルス感染症の拡大を防止するため、参加者の健康状態を確認することを目的としております。

本健康チェックシートに記載した個人情報について、長野県アウトドア連盟および各チームは、厳正なる管理のもとに取扱い、チーム関係者の健康状態の把握、来場可否の判断および必要に応じた連絡のためにのみ利用します。また、個人情報保護法等の法令において認められる場合を除き、本人の同意を得ずに第三者に提供いたしません。但し、大会会場にて感染症患者またはその疑いのある方が発見された場合に必要範囲で保健所等に本シートもしくは、本シートに関する内容を提出することがあります。

保護者 氏名(自署)

連絡先電話

Eメールアドレス

フリガナ	生年月日	西暦	年	月	日	所属	連絡先	Eメール アドレス
氏名	電話番号					住所		

チェック項目	日付														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
朝の体温		℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃
① 平熱を1℃以上超える発熱がない															
② 咳(せき)、のどの痛みなどの風邪症状がない															
③ だるさ(倦怠感)、息苦しさ(呼吸困難)がない															
④ 臭覚や味覚の異常がない															
⑤ 体が重く感じる、疲れやすい等がない															
⑥ 新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がない															
⑦ 同居家族や身近な知人に発熱・だるさ・味覚異常に異常がある人はいない															
⑧ 政府から入国制限、入国後の観察期間が必要とされている国、地域等への渡航又は当該在住者との接触はない															
帰宅後の検温		℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃
保護者のサイン															

チェック項目	日付														
	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
朝の体温		℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃
① 平熱を1℃以上超える発熱がない															
② 咳(せき)、のどの痛みなどの風邪症状がない															
③ だるさ(倦怠感)、息苦しさ(呼吸困難)がない															
④ 臭覚や味覚の異常がない															
⑤ 体が重く感じる、疲れやすい等がない															
⑥ 新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がない															
⑦ 同居家族や身近な知人に発熱・だるさ・味覚異常に異常がある人はいない															
⑧ 政府から入国制限、入国後の観察期間が必要とされている国、地域等への渡航又は当該在住者との接触はない															
帰宅後の検温		℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃
保護者のサイン															

あてはまる場合は○をチェック欄に記入してください。
○がつかない項目がある場合で、その日から2週間以内に該当がある場合は、自主的に参加を見合わせてください。